

里子及び里親の状況と里子の well-being の関連性

○ 同志社大学大学院 高橋順一 (8413)

野口啓示 (福山市立大学・2736), 姜民護 (同志社大学・8570)

石田賀奈子 (立命館大学・6061), 伊藤嘉余子 (大阪府立大学・3930)

キーワード: 里子, Well-being, 里親

1. 研究目的

里親制度は、特に 2002 年の改正以降、拡充が進められてきた。近年においては、2016 年の「新たな子ども家庭福祉のあり方に関する専門委員会報告(提言)」における里親制度の充実、改正児童福祉法における里親委託の優先性ならびに一貫した里親支援(里親開拓から児童の自立支援まで)の都道府県(児童相談所)業務としての位置付け、2017 年の「新しい社会的養育ビジョン」における里親委託率の高い目標設定がなされ、制度の強化が急がれている。

評価や研究においては、特に里親支援体制における人員配置や活動、利用、里親委託率、登録里親数等の指標が重視され、専任職員数や地域差、レスパイトといった課題が指摘されている。また、児童福祉法の理念における、子どもの健全な育成や生活の保障、愛護、さらには社会生活の自立に関する、里子視点の指標を用いた評価や研究も不可欠である。

そこで本研究は、効果的な里親支援体制の構築に資することをねらいに、「里子及び里親の状況」と「里子の well-being」の関連性を明らかにすることを目的とした。

2. 研究の視点および方法

調査対象は、里子を受託している全国の里親家庭 4,038 世帯とし、郵送法によるアンケート調査を実施した。配布に関しては、里親会支部 66 か所に各会員の里親家庭に調査票を発送していただいた。調査内容は、里子及び里親の状況(里子の性別、年齢、障がいの有無、被虐待経験、就学状況、人数、里親の養育の自己評価、1 項目版社会福祉関連 QOL、世帯収入)、里親の代理評価による里子の well-being とした。なお、里子の well-being に関しては、「簡易版子どもの well-being 測定尺度 (Child Well-being Concise Scale)」を開発して用いた。調査期間は 2017 年 11 月 8 日～2018 年 1 月 10 日までの約 2 か月間であった。1,726 家庭から回答を得た(回収率 42.7%)。ただし、ファミリーホームであると考えられるデータや 20 歳以上の里子のみ家庭のデータ等を除外した結果、有効回答数は 1,214(有効回答率 30.1%)となった。

統計解析では、まず簡易版子どもの well-being 測定尺度の構成概念妥当性と信頼性を検討した。構成概念妥当性は、構造方程式モデリングを用いた確認的因子分析により、因子構造モデルの妥当性を検討し、信頼性は内的整合性を  $\omega$  係数で検討した。冗長性の高い項目を除くため、多分相関係数が 0.8 以上のペアのうち一方を除外する手法を採用した。次に、個人や環境の特性としての「里子及び里親の状況(里子の性別、年齢、障がいの有無、

被虐待経験、養育の自己評価、社会福祉関連 QOL、世帯収入)」が「里子の well-being」に影響するという、予測的なモデルを仮定し、モデルのデータへの適合性と変数間の関連性を構造方程式モデリングで検討した。モデルのデータへの適合度は、CFI と RMSEA で判定し、パラメータの推定には WLSMV を用いた。以上の統計解析には、IBM SPSS Statistics 24 と Mplus 7.3 を使用した。なお統計解析には、回収されたデータのうち、里子が 1 人の家庭で且つ分析に必要な全ての変数に欠損値を有さない 702 家庭のデータを使用した。

### 3. 倫理的配慮

本研究は、大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科設置の倫理審査委員会の承認を得て実施した。具体的には、匿名化した上でのデータ処理、調査結果の公表の際に個人が特定されない配慮などを行った。

### 4. 研究結果

健全育成や生活満足、愛着形成、自立などに関する計 5 項目の簡易版子どもの well-being 測定尺度の一因子モデルのデータに対する適合度は、CFI=0.997, RMSEA=0.070 であった。 $\omega$  係数は 0.861 であった。「里子及び里親の状況（里子の性別、年齢、障がいの有無、被虐待経験、養育の自己評価、社会福祉関連 QOL、世帯収入）」が「里子の well-being」に影響するという、モデルのデータに対する適合度は、CFI=0.984, RMSEA=0.048 であった。変数間の関連性においては、養育の自己評価（標準化推定値：0.432）、里子の年齢（-0.228）、社会福祉関連 QOL（0.211）、障がいの有無（-0.151）に、里子の well-being に対する統計学的に有意な関連性が認められた。本モデルにおける里子の well-being に対する説明率は、44.7%であった。また外生変数間においても統計学的に有意な相関関係が示された。

### 5. 考察

簡易版子どもの well-being 測定尺度の構成概念妥当性と信頼性は許容水準にあった。この尺度で測定した里子の well-being は、養育の自己評価、社会福祉関連 QOL からは正の、里子の年齢、障がいの有無からは負の影響を受けていた。高年齢や障がいをもつ里子の里親への養育支援ならびに里親の社会生活への支援が、里子の well-being に寄与すると示唆された。障がいや学校、自立に関する相談、支援、研修の強化が急がれる。他の子どもの well-being との比較、里子による評価、パーマネンシー等の検討が今後の研究課題である。

#### 謝辞

本研究は平成 29 年度厚生労働省「子ども・子育て支援推進調査研究事業」課題番号 14「里親家庭における養育実態と支援ニーズに関する調査研究事業」（代表：伊藤嘉余子）の成果の一部をまとめたものである。調査研究にご協力賜りました関係諸氏ならびに里親の皆様へ深謝いたします。